令和7年度庄原市委託事業 第22回 認知症講座「認知症・自分のこととして」（講師：石黒 秀喜）

2025年10月18日 庄原市民会館 大ホール

2025.10.20 Facebook

町永俊雄
1日・

広島県庄原に行ってきた。
今回の庄原での「認知症講座」では、第一部が「老い支度クリエーター」を名のる石黒秀喜さんの講演で、誰もが認知症になりうる時代の老い支度から、自身のこととして「上手に往生」し、さらにその後の葬式やお墓に至るまでの準備を「子供への孝行」として、軽妙に語ったのだった。
なるほどなあ。
どう死ぬかということは、それはとりもなおさず、どう生きるかであり、どう生きるかということの指南が「老い支度」であるとするなら、それはどこか「老いの力」なのかもしれない。

町永俊雄さんFBコメント:左から、マチナガ、和田行男さん、70歳になったとのことでかつての国鉄時代の制服姿。人生を語りたいんだって。「老い支度」の講演者、石黒秀喜さん、戸谷修二医師。会場の人の声に応えながら、「老いる」こと、「生きる」ことを語り合った。

（前頁からの続き）

私は庄原には、あのカリスマ介護福祉士の和田行男さんに誘われてもう10年以上毎年訪れている。最近、庄原に行くたびに浮かび上がるようにして感じるのが、この「老いの力」なのである。
少子超高齢社会は、老いに怯える社会である。
ところが庄原のような過疎地と言われる地域社会が、近年、実は生き生きと息づく姿を見せている。
そこにあるのが「老いることの地域共有」という力なのである。こうした地域ほど「互助的な生活圏」が再生している。それは私が長年関わってきた「NHK 認知症とともに生きるまち大賞」の各地の取り組みもまたそのような風景を見せている。

確かに「老い」は衰えである。しかしその弱さを互いに差し出すことが、「関係」を生む。つながりを作る。
庄原での風景は、「誰かに頼りながら、同時に誰かを支える」という相互依存的な自立生活圏の再生であろう。

「人は一人では生きていけない」が単なる原理に浮遊しているのではなく、ここでは「依存を前提とした関係という自立システム」を生み出しているといっていい。
それは言ってみれば、「老い」を「個」が抱え込むのではなく「関係」へと拓いていく「老いの社会化」なのである。
地域コミュニティを行政的、地理的境界を超えて、自分たちの「関わりの場」として捉え直しつながっている。
なつかしく豊かな私たちのふるさとの再生だ。

そしてそのことが、沈んでいく夕陽の美しい輝きのようにして、
「老いの力」が、「存在するだけで価値がある」という普遍の共生の倫理を社会に照らし出す。
これはきっと、エリクソンやマズローが指し示した、人間の発達とは「個の完成」ではなく「関係の成熟」ということなんだろうなあ。
会場に毎年詰めかける地域の人々を前にして、この人たちから学ぶことがいかに大きいものであるのか、そんなふうに思ったのだ。

庄原は、松茸のシーズンに入っている。
松茸の土瓶蒸しの味わいが、なぜか豊かな「老いの力」につながった。
うまかった。

■講座開催案内

令和７年度庄原市委託事業　第 22 回　認知症講座

「認知症・自分のこととして」

誰もがなる可能性のある認知症。自分、家族、友人、近隣者として身近なことです。みんなが明るく、元気に年を重ね、庄原市が日本一「安心して認知症になれる町」となるよう願っての講演会です。「認知症」をより深く理解して、たとえ認知症になっても「自分らしく生きるための備え」をしましょう。わかりやすく、明るくお話くださいます。みなさまお誘いあわせてご参加ください。

第一部　「明日に備える」　講師　石黒秀喜氏

元厚生労働省大臣官房参事官。現在は認知症の人と家族の会東京都支部世話人、JDWG 日本認知症本人ワーキンググループ賛助会員他。介護保険制度に創設時より携わる一方、義母の認知症や介護する義父の生活を身近にしたことから、「生き方・老い方」など、自分らしく生きるための「備えの必要」を提唱している。著書「上手に老いるための自己点検ノートⅠ、Ⅱ」でわかりやすく解説。

第二部　「みんなで語ろう」

シンポジスト　石黒秀喜 氏（元厚生労働省参事官）
和田行男 氏（（株）大起エンゼルヘルプ　取締役）
コーディネーター　町永俊雄 氏（福祉評論家・元 NHK エグゼクティブアナウンサー）

日時）　令和７年 10 月 18 日(土)　入場無料
13 時 30 分～16 時 00 分
場所）　庄原市民会館　大ホール

主管：医療法人社団聖仁会　庄原市西本町 2-15-31　☎ 0824-72-8686

■講演概要

1．庄原市が日本一“安心して認知症になれる町”を目指すなら！

○誰でも長生きすれば認知症になる、と自分事と捉えて、改めて自分の老後を考える住民を増やすことが出発点である。
○その際、“古い認知症観”を捨て、国が提唱している“新しい認知症観”を理解し、認知症を忌み嫌わずに、異変を感じたら早期に専門医を受診するメリットを重点的に啓発する。
○そうすると、まだ出来ることが沢山残っているうちに、認知機能が低下していく自分の今後の暮らし方への備えを、家族や周囲の人、医療・介護の専門職の人たちと考えることができる。

2．認知症モデル事例の説明

○認知症の状態になった義母を取り巻く人間模様を提示して、本人と家族との軋轢、悪循環に陥る構造を説明。
○もし石黒が認知症になったらその後どういう生き方・逝き方になるのか、モデル事例を説明しながら、自分事として考えてもらう機会を提供

3．事前指示書の意義を説明

○認知症の著しい進行やその他の傷病により、状況判断や意思表明ができなくなった場合に備え、人生の最終段階を想定した事前指示書の準備の効用について説明。